

「小さな学校」の 教育的意義と課題

藤岡秀樹

ふじおか ひでき
1955年生まれ
京都橋大学発達教育学部教授・京都教育大学名誉教授
研究領域：学校心理学、教育評価、キャリア教育
著書：「学力・能力・適性の評価と指導」(京都法政出版、1994年)
『小学校指導要録記入文例1000』(日本標準、2021年)
共編著：「中学・高校教師になるための教育心理学 第4版」(有斐閣、2020年)
論文：「特別の教科「道徳」—教材論・指導論・評価論に焦点を当てて—」(心理科学 39巻2号、2018年)

一 はじめに

筆者は、小規模教育、とりわけ複式学級の指導やへき地教育に関心をもち、研究を行ってきた。初任は岩手大教育学部であったことも、その理由である。これまで公刊した論考に新たな知見を加えて、「小さな学校」の教育的意義を振り返ってみたい。

二 小規模校での教育 ——子どもと教師の感想

最初に、小規模校で学んだ中学生の感想（藤岡、二〇二〇）を記そう（原文のママ、名前はイニシャル表記）。

中学生Ⅰ（奈良県二二歳）

僕がこの春卒業した小学校はとても小規模で、児童は

わずか五四人だった。一学年の人数が少ないので、他の学年の子とも当然のように遊ぶ。みんなが仲の良い学校だ。一人一人の名前を全員が知っている。

ほかにもほこれることがある。この学校ではあいさつ日本一を目指している。僕たちのあいさつは、やらされているのではなく、「がんばる」気持ちから生まれた心のこもったあいさつだ。

また、休み時間が楽しくない子はいないと思う。はずかしがりの子が「遊びの輪に」入れて」と言えなくても、この学校では必ずさそってくれる子がいるからだ。

そんなふうに小規模校は小規模校でいいところがたくさんある。さみしそうに思われるかもしれないが、ぜんぜんそうではない。一人一人が認め合い、がんばった子はがんばったと認め合い、苦手なことはできるようになり、得意なことはさらにのびる。とてもいいと思いませんか。僕はこんな自分の母校をほこりに思う。

（朝日新聞大阪本社版「声」二〇一九年四月一九日）

少人数学級 いいところある

中学生Ⅰ（奈良県二三歳）

通っている中学校は生徒数が三人、同じ校舎にある小学校は、七人ととても少ないです。だからいここや習い

事の友達に「人数が少ないって大変そう」「休み時間にして遊ぶの？」とよく聞かれます。そしてみんな「人数が少ないのは嫌じゃないの？」と聞いてきます。

しかし、嫌だとはあまり思いません。なぜなら、休み時間は小学生と中学生、先生と一緒にドッジボールなどで遊び、少ないからこそみんなと仲良くできていいと思います。運動会など行事の役割は、町の学校と比べれば少し多いかもしれませんが、先生も協力してくれるので大丈夫です。

多くの人が人数の少ない学校は大変だ、嫌だなど思ってもいいかもしれません。しかし、少ない学校にもいいところはたくさんあるので、そんな学校のよさを知ってもらいたいです。

（朝日新聞大阪本社版「若い世代」二〇一九年四月一八日）

この二編の投稿記事には、小規模校の「よさ」が示されており、子ども同士の繋がりが密で、異学年交流ができており、「学び合い」「助け合い」が行われていることが分かる。また、自治能力の高まりも見いだせる。

次に、複式学級担任の小学校教師の感想を紹介する。

複式学級で児童と充実した毎日

教員Ⅱ（鹿児島県三三歳）